ほぼ隔月刊
中山間タイムズ
10年住み続ける、わがまち（むら）づくりのお手伝い
第８号
（10月11日）
発行
富山県
中山間地域対策課
お問合せ
076-444-4578

東京大学「フィールドスタディ型政策協働プログラム」

県内２ヶ所 魚津市（松倉）・砺波市（雄神）で始まる

東大ＦＳ事業の現地活動が八月中旬から、魚津市松倉地域、砺波市雄神地域で始まった。この事業は、東京大学生を中山間地域に受け入れて地域活性化策を導き出すもので、地域が主催し、県や市町村の協力のもと、実施している。

ここで学生が提言した地域活性化策等は、行政や地域にフィードバックされ、地域課題の解決などに活用される。

砺波市雄神地域では、東京大学の一年生から四年生まで、男性二名女性二名の四名が参加。「地域観光の推進」をテーマに地元住民の案内で急な山道を含むコースや地域内の史跡、歴史的建造物の視察を行った。

参加した学生は「富山には初めて来たが、ここには素晴らしい資源がいっぱいある。この魅力を地域外の人たちに伝えるお手伝いができれば」と話している。

この後、学生たちは地域ＭＡＰの作成やＳＮＳでの効果的な発信法について議論を重ねていく予定。

同地区の杉森貢自治振興会会長も「この事業が、雄神に人を呼び込む起爆剤になれば」と期待を寄せている。

魚津市の松倉地域では「越中最大の松倉城跡を中心とした歴史的文化的価値のある里山の暮らしと地域の再興」をテーマに東大生、女性三名、男性二名の五名が参加。第一回現地活動を八月十七日から八月二十日の三泊四日の日程でおこなった。

現地活動は三回実施し、第二回は十一月中旬、第三回は来年三月上旬の予定。

最終回の第三回では地域課題の整理、課題解決に向けた提言を魚津市内で実施する予定。

飛騨街道100年プロジェクト

旧飛騨街道片掛登り口

細入地域では、令和4年に富山県の「話し合い促進事業」を活用して「細入みらい会議」を開催し、細入地域の望ましい未来像について話し合いました。

神通川沿いの細入地域は、富山藩時代には関所が置かれ、人と物が往来する交通の要衝で、古くから飛騨、信州、東海地方との交流があり、銀山や水力発電で栄える活気ある地域でした。

その地域特性を生かし、交流人口の増加や、持続可能な居住地域の維持を目指し、**一〇〇年以上前に役割を終えた「歩く飛騨街道」を地域の歴史的シンボルとして復活するアイディアが「細入みらい会議」で発案され、一〇〇年後の未来に伝えるべく「飛騨街道一〇〇年プロジェクト」が始動しました！**

「飛騨街道一〇〇年プロジェクト」では県の中山間地域チャレンジ支援事業を活用し、

①観光場所や撮影スポットを記した観光案内看板の設置、②草木で荒れた旧飛騨街道を整備復元し旧飛騨街道ウォーキングイベント、③猪谷関所館で講師を迎えて「安政飛越地震と飛騨街道」講座の開催などを行い、飛騨街道を盛り上げる活動に多くの方々が参加者されました。

細入地域では、さらに地域の魅力を発信し、若い方に住んでもらえる魅力ある移住定住地域として認められることを目指して、地域住民が一丸となって地域づくりに努められております。

旧飛騨街道庵谷登り口

飛騨街道100年プロジェクト講座「安政飛越地震と飛騨街道」

片掛銀山跡

「あいの風とやま鉄道」がJR城端線・氷見線の経営を引き継ぐ話ではなくて……

祝 開通九十周年

ザ・高山本線

富山県の細入、八尾の中山間地域の人々の日々の「足」として親しまれている高山本線が今年の十月二十五日(金)に全線開通九十周年を迎えます。

取材中お会いした五十代男性は「昔から通学、通勤に利用しているが、そんなに歴史があるとは意識していなった。便利な交通手段なのでこれからも持続発展してほしい」と話していました。

下に同線の中山間地域の主要駅をご紹介します。この機会に各駅を訪れて高山本線が歩んだ九十年に思いをはせてみませんか。

《越中八尾駅》

1927年鉄道省（国鉄）飛越線として開業。1934年に線路名改称により高山本線に編入される。1977年に駅前に観光看板を設置し、開業50周年式典を挙行する。1979年に欅製の駅名標を設置。1987年に国鉄分割民営化により、JR西日本の駅となる。1993年に駅西口と東口を結ぶ跨線橋「町道八尾駅東西線」（延長84メートル）が完成。

《猪谷駅》

1930年に飛越線の駅として開業した富山県最南端の駅。のちに高山本線全線開通で同線に編入された。JR西日本の管理駅となっているが、JR東海との境界駅である。2006年まで神岡鉄道神岡線の乗り入れ駅であった。（富山市猪谷）

ホームから見える場所に旧神岡鉱業のアパートがそのまま残っており、往時の隆盛が偲ばれる。近くにある猪谷関所館もVR体験ができるなど、一度は行ってみたい場所である。

《楡原駅》

1930年に開業。1989年に現駅舎に改築され、記念行事が行われた。（富山市楡原）

細入村制施行100周年を記念した“ふれあい広場”が併設されており、池や様々な種類の植栽が利用者の目を楽しませてくれる。

東大FS（魚津市）で見つけた 万屋（よろずや）

昭和遺産

「木下酒店」

（魚津市松倉・鹿熊集落）

消滅危惧種

県庁のChatAIによると「万屋」とは文字とおり「万雑多な品物を扱う店」、食料品から日用雑貨、衣料品など様々な品揃え。地域の人々の生活に密着した売場、「よろずや」という呼び名もこの万屋に由来している。家族経営が一般的で、親子二代三代と続く店が多い。昔は村や町に一軒は必ずある存在だった。富山県に残っている「万屋」の数については、正確な統計データーがない……

前置きはここまでとして

「万屋」木下酒店がある魚津市松倉・鹿熊地区は旧国道八号線交差点大光寺から車で十二、三分、角川（二級河川）の上流にあり、魚津の史跡「松倉城跡」の麓にある。集落人口約一二〇人、世帯数約五〇の小さな集落。移住者、藍染め屋・aiyaの**南部歩美さん**もここに住んでいる。

店主は木下理佳さん。昭和二十三年、理佳さんの先々代の姑さんが開業、理佳さんで**三代目、創業七十六年**。時期は不明だが、改築されており「万屋」から連想する一般的な古さ、古民家の雰囲気はお店にはない。店の大きさは約十八坪（五十八㎡）、衣類・着物の販売のための小上りもある。扱い品目は酒、たばこ（常連さんの銘柄のみ）、調味料、生鮮品（野菜・肉）、冷凍食品、お惣菜、お菓子、パン、アイスクリーム、日用雑貨、衣料品（肌着・靴下・婦人服・着物）、切手・はがきなどまさに「万屋」と呼ぶにふさわしい品揃え。このほかに、季節によっては野菜の苗も販売する。

お客様は鹿熊集落の人をはじめ松倉地域の人、山の工事関係者、松倉地域各種団体など、中には毎日三食、ここで購う高齢者の方もいる。社会の情勢に応じて、品揃えも変わってきた。通常扱いの無い商品も、依頼があれば何でも準備する。神社のお正月飾り、御鏡から仏事の茶菓子、地区イベントの直会（なおらい）のオードブル、バーベキューの材料まで。断らないのが木下酒店の信条、これぞ「万屋」魂か。開店時間は朝六時四十五分から大体、夜八時まで。休業日は一月一日のみ、お客さんが来れば閉店後でも対応、営業時間は関係なし、まさにコンビニエンスストアのルーツここにありか。

理佳さんがお店を継いだのは、実母の介護で仕事を辞めたのを契機に店を手伝うことに、「成行きだったかな」とのこと。

昔は駄菓子屋さんも兼ねていた、時代と共に品揃えも変わったが、**商い**と共に舅が元村議だったこともあり、昔から地域の困りごと相談所だった。理佳さんは「**いろいろな人と交わること、つながることは良い事。頼まれたことは断ったことはない。**」と高齢者を主にだれかれなしに、気軽になんでも相談にのってあげている。今もお店は集落住民にとって唯一無二、**生活全般の拠り所**となっている。

子供達は地域外で仕事につき、今のところ後継者はいない。需要、要望がある限りはお店を続けたいと理佳さんは言っていた。「万屋」の消滅は時間の問題かもしれないが、万屋持続化補助金、万屋事業継承支援とかないものかと思った。